

神戸国際大学

キリスト教センター通信

2024年9月24日 第117号

キリスト教センター長 ミカエル 藤倉哲哉

「わかる」ということ

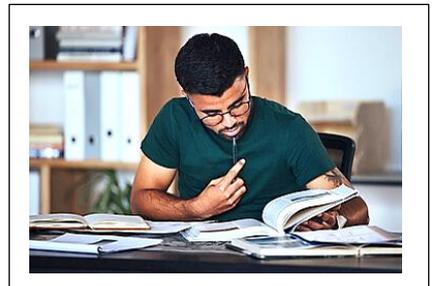
授業をされていて「わかりましたか」と学生に尋ねると、およそ「わかった」という答えが返ってきます。「本当にわかった？」と続けると遠慮がちに「だいたい…」というので、いまの話の前に出て説明してごらんという例外なく「できません」となります。

学び方にはさまざまな捉え方があるのですが、大学の初年度生向けの学習の基礎を学ぶクラスではいつも「授業を誰かに説明できたら理解できている」、「ノートはそれを見ながら授業を再現できるように取る」と伝えていきます。教室で座って聞いているとそれだけでわかったつもりになりがちですが、学生であればインプットしたことはいつでもレポートやスピーチ、プレゼンテーションなどにアウトプットできるよう、正しくきれいに整理して保存しておかなければなりません。

ところで、私たちは何かをわかろう、何かを極めようとして学んだり調べたりするのですが、どうしてもわからないこともたくさんあります。森羅万象すなわちこの世界だけでなく宇宙に存在するすべてのものごとや事象・現象の一切をわかっている、というのは全知全能の神ではないので無理でしょうが、すぐ目の前にあること、いま隣にいる人のことでさえ知らない、わからないこともあります。

「わかる」は解る・判る・分かるなどと書きます。それぞれの「わかる」は同じように使っていますが、およそ解る=理解・了解する、判る=判明・判別する、分かる=区別するなど意味合いの違いがあります。「わかる」の語源が「分ける」ということは比較的知られているようですが、ある事象を他と区別して、その違いを理解したうえで了解する=承認する・受け容れることを意味することまでは日常の「わかる」ではつながりません。話合いの際などでいう「言いたいことはわかるが納得できない」=「趣旨については理解したが了承できない」と置き換えるとわかりやすいでしょう。

私たちは学んだことをおぼえた時点で「わかった」と思いがちですが、正しいこと・正しいものを承認する(謙虚に受け容れる)ことができ初めて「わかった」ことになるのです。学んだら「わかった」と言いたいのですが、暗記するだけでは「わかった=受け容れる」ことにはならず、毎日のように変化が目まぐるしく、また確たる指標もなく偏りや驕りばかりの社会では「真理」に近づくのは決して容易ではないようです。



諸学校のための祈り (日本聖公会祈祷書より)

全能の神よ、わたしたちはただ主の賜物によってまことの知恵を得ることができます。どうかみ名によって建てられた神戸国際大学に恵みを下し、教える者と学ぶ者を祝福してともに知識を深め、主の真理を悟り、謙遜な心をもって唯一の神を仰ぐことができるようにして下さい。

主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

